

2003年6月15日 父の日礼拝

おやじの背中

～我が子への遺産～

加藤 享

[聖書]士師記8章22～23、29～35節

8:22 イスラエル人はギデオンに言った。「ミディアン人の手から我々を救ってくれたのはあなたですから、あなたはもとより、御子息、そのまた御子息が、我々を治めてください。」23 ギデオンは彼らに答えた。「わたしはあなたたちを治めない。息子もあなたたちを治めない。主があなたたちを治められる。」

29 ヨアシュの子エルバアルは、自分の家に帰って住んだ。30 ギデオンには多くの妻がいたので、その腰から出た息子は七十人を数えた。31 シケムにいた側女も一人の息子を産み、彼はその子をアビメレクと名付けた。32 ヨアシュの子ギデオンは、やがて長寿を全うして死に、アビエゼルのオフラにある父ヨアシュの墓に葬られた。33 ギデオンが死ぬと、イスラエルの人々はまたもバアルに従って姦淫し、バアル・ベリトを自分たちの神とした。34 イスラエルの人々は、周囲のあらゆる敵の手から救い出してくださった彼らの神、主を心に留めなくなった。35 彼らはまた、イスラエルのために尽くしてくれたエルバアル、すなわちギデオンのすべての功績にふさわしい誠意を、その一族に示すこともしなかった。

[序]おやじの背中

長女からの誕生日カードにこんな言葉が書かれていました。「これから家族をつくろうかと考える今、親の大変さと、その影響をつくづく考えています。私の人格の基となる数多くの Value を、パパから教わったと思います。ありがとう」私は牧師ですから、彼女は毎週礼拝で私の説教を聞いて育ちました。ですから我が子に人生のメッセージを聞いてもらうという点では、私は特別に恵まれていました。

しかし一般的に言えば、子供と父親との関係は、母親とは比べものにならないくらい薄いものではないでしょうか。それでもどの父親でも**人生のメッセージ**を我が子に遺します。朝日新聞に「**おやじのせなか**」というコラムがあり、世間に知られている人々が父親の思い出を書いています。父親が生きざまを通して遺すメッセージはやはり、読む者の心を打ちます。

今日は父の日礼拝ですので、聖書の中から一人の父親の遺した悲劇的なメッセージをお伝えしましょう。

[1]ギデオン物語

よくホテルの客室に聖書が置かれています。また日本では学校で英語と日本語対訳の聖書をもって、それがきっかけで教会に来はじめた人も多くいます。世界各地でホテルや学校・病院に聖書贈呈運動を進めている「ギデオン協会」の働きです。**ギデオン**は、紀元前1100年代に実在したイスラエルの士師（リーダー）の一人でした。

当時砂漠の民ミディアン人が、収穫期になるとカナンの農作物を略奪にやって来ました。イスラエルの人々はすっかり貧しくなり、神さまに助けを叫び求めました。神さまは彼らの祈りを聞き入れ、ギデオンを指揮官にしてミディアンと戦わせて、**大勝利**をお与えになりました。有名なギデオン物語です。

彼は自分が英雄豪傑だとは思っても居ませんでした。神さまから呼びかけられた時に、「私の一族はマナセの中でも最も貧弱なものです。それに私は家族の中で一番年下のものです」（士師 6:15）と尻込みしています。すると神さまはおっしゃいました。「いや、お前が自分の力で勝つのではない。私が私の力をふるうのだから、それでよい」

いよいよ収穫期になり、ミディアンが大軍で襲って来ました。ギデオンは角笛を吹いて軍勢を集めましたら、32,000 人が集ってくれました。でも敵は 135,000 人、4 倍以上です。ところが神さまは 32,000 人でも多過ぎるから家に帰せとおっしゃって、何と 300 人にまで減らしてしまいました。

たった 300 人で 135,000 人の大軍を相手に戦わなければならなくなりました。しかしギデオンは**逃げ出さなかった**のです。ここが彼の偉いところです。彼は神さまの命令通り、300 人を 100 人ずつ 3 組に分け、真夜中に敵陣を囲んで一せいに角笛を吹き、水がめを破り、たいまつをかざして大声を上げました。ただそれだけをしたのです。

ミディアンは不意をくらって同士討ちを始め、逃げ出しました。こうして元気づいたイスラエルの各部族が、ミディアンに襲いかかり、2 人の王を殺し、打ちのめしてしまうことが出来ました。ミディアン人は二度と攻めて来なくなり、それから 40 年間も太平が続きました。以上までが、人々に親しまれているギデオン物語です。しかし今日の説教はそれから後の物語を取り上げます。

[2]ギデオンが死んだ後に

イスラエルの人々は、大勝利をもたらしてくれたギデオンに言いました。「ミディアン人の手から我々を救ってくれたのはあなたなのですから、あなたはもとより、御子息、またその御子息が、我々を治めてください」（8:22）当然のことでしょう。すぐれた指導者、強い王がいれば国は安全です。

しかしギデオンは答えました。「私はあなたたちを治めない。息子もあなたたちを治めない。主があなたたちを治められる」（8:23）神さまが国をお治めになるのだから、王はいらないというのです。何と立派な言葉でしょうか。士師の時代が終わり、イスラエルに王制がしかれるようになった時にも、あの大預言者サムエルが同じ信仰に立って王制に反対しています。（サムエル上 8:6）

ギデオンは「300 人で戦え」と神さまがおっしゃれば、「はい」と従いました。神さまの命令にはそのまま従う勇気ある信仰の持ち主でした。また大手柄を立てて、王にな

って欲しいと人々に担がれた時に、「神さまが国を治めるのだから」といって辞退しました。見識においても実に立派な人だったと思います。

ところが 35 節をご覧ください。ギデオンが年をとって死ぬと人々は、「イスラエルのために尽くしてくれたエルバアル、すなわちギデオンのすべての功績にふさわしい誠意を、その一族に示すこともしなかった」のです。これは一体どうしたことでしょうか。

「**去る者は日々に疎し**」(Out of sight, out of mind) と言うことわざがあります。「死んでしまった人は、月日がたつにつれて忘れられていく。親しかった人も、遠く離れてしまうと、疎遠になっていく」というのです。そこで日本では、お葬式の終わりに葬儀委員長が会葬者に向って「故人に対する生前のご親交を、引き続き遺族にも賜りますように」とよく挨拶するものです。

確かに人情というものは移ろいやすいものです。でもギデオンは、自分たちを苦しみのどん底から救ってくれた**大恩人**だったのです。それが、彼が死んだらその功績にふさわしい誠意を、遺族に対して全くしめさなくなってしまったとは、何とも侘しい限りです。「あなたはもとより、御子息、そのまた御子息が、我々を治めてください」という言葉はどうなってしまったのでしょうか。

[3] 悲劇を招いたギデオンの落度

士師記 9 章には、息子たちの末路が記されています。ギデオンには息子が 70 人いました。多くの妻を持ったからです。その他に側女が生んだ息子アビメレクがいました。このアビメレクが、後に 70 人の息子たちを、末の子を除いて皆殺しにして王になってしまいました。(9: 1～6)

これは息子たちの間に**権力闘争**が起こり、アビメレクが勝ち抜いたということでしょう。ところがアビメレクは人々をよく治めることができず、やがて殺されてしまいます。こうしてギデオンの家は息子たちの代で滅んでしまいました。

このような経過を見ていきますと、イスラエルの人々が、ギデオンの功績にふさわしい誠意を子供たちに示さなくなったのは、彼らの不誠実さもあるでしょうが、一方では息子たちにも人々の支持を失う実態があったということが言えそうです。それにしてもギデオンともあろう人の息子たちが、末の子を除いて皆殺されてしまうとは、**何という悲劇**でしょうか。

その原因を聖書に探しますと、二つ浮かび上がって来ます。第一はギデオンが**多くの妻や側女**を持って、息子を 71 人もつくったことです。モーセは「王は多くの妻をめぐって、心を迷わせてはならない」(申命記 17:17) との律法を遺しています。イスラエル王国三代目のソロモン王は、歴史上一番の栄華をきわめた人ですが、王妃・側室 1000 人を持ち「心を迷わせた」ので、子供の代に国は二つに分裂してしまいました。

(列王記上 11 : 1~13) ギデオンはこの点で、落度がありました。

第二は、皆から集めた戦利品の耳輪約 20kg で**エフォド**をつくり、自分の町オフラに置いたことです。エフォドとは大祭司が神の前に立つときに身に着ける礼服を言います。でも 20kg の金でつくり、自分の町に置いたとありますから、果たして祭服だったのでしょうか疑問です。私は今でいう戦勝記念のカップかトロフィーに当たるものではないかと想像します。

ギデオンは神さまが輝かしい大勝利を与えて下さったことを、子や孫たちに繰り返し語り伝えていきかけたのでしょう。しかし人々の中から、自分もそのような勝利にあやかりたいと思ってエフォドに手お合わせて拝む人が出てくると、それをまねる人が次々に生まれてきて、次第にエフォドが**祈願の対象**になっていったのではないのでしょうか。

これは真の神のみを神とし、神でないものは拝まないとする信仰からすれば、宗教的浮気・姦淫です。こうして神さまに対する誠実さが崩れ始めますと、その人の生き方や、誠意も崩れてきます。そこで聖書は、エフォドを作って町に置いたことがきっかけで、人々の宗教的浮気が起こり、それが「ギデオンと一族にとって**畏**となった」と述べたのです。

或る人がこう言っています。「**ギデオンの失敗**は、金 20kg でエフォドを作ったことだ。彼は、大勝利を与えて下さった神さまに感謝して、最後まで神さまに誠実に聞き従って生きる**親父の背中**を、子や孫に遺して死ぬべきだった。」

[結]我が子への最良の遺産

内村鑑三が今から 110 年前の明治 26 年に、箱根の夏期学校で講演した「**後世への最大遺物**」は、今でもよく読まれています。内村先生 33 才の講演でした。33 才でこのような素晴らしい講演をなさるとは、優れた方だな一とつくづく思います。

人間、子孫に何をのこすか。先ず考えられるのは**金**であろう。確かに天下に流通する金を一ヶ所に集めるには、よほどの才能が必要だ。誰にでも出来ることではない。次に考えられるのは、**事業**を遺すことだ。社会に役立つ事業、例えば貯水池をつくりやせた土地を豊かな畠に変えるとか、暮らしに便利な発明をする。これも特別な才能のある人にして初めて可能で、誰にでも出来ることとは言えない。次に**思想**を遺す。ペンは剣よりも強く、これも世に大きな影響を与える。しかしそれにはまた才能が必要で、誰でもとは言えない。

他に何があるだろうか。ある。誰にでも出来る最も素晴らしいものがある。それは「**勇ましい高尚な生涯**」である。自分がどう生きたか、その生き方を遺す。これなら誰でも出来る。そして勇ましい高尚な生涯を遺すことこそ、後世への最大遺物だ。――

内村鑑三のこの言葉が多くの人々の心を打ち、今でも読みつがれているのです。

そうです。ギデオンがしなければならなかったのは、まさにこれでした。彼はエフォドを作って子や孫たちに手柄話を聞かせることが出来ました。しかしそれと同時に彼らに見せたのは、多くの妻を持って心を迷わせることであり、兄弟を皆殺しにするような、ならず者の息子を残してしまったことでした。そしてこのような生活が人々を失望させ、信頼を裏切ることになって、彼の死後、遺族に対する誠意を失わせてしまったのでした。

ギデオンが「ギデオン協会」として今日も名を留めているのは、わずか300人で135000人の大軍を打ち破ったからです。彼には指揮官としての自信や、優れた能力を持っているという自覚もありませんでした。でも必死になって集めた32000人を、神さまから多過ぎると300人に減らされても、逃げ出さずに神さまの指示に従う信仰がありました。

この**信仰**は金20kgのエフォドでは伝えられないものでした。それは就職して暮らしの糧を稼ぎ、結婚して家庭を築き、友と協力してよい社会を作っていく私たちの**毎日の生き方の中で現わす**以外に、伝えようがないものです。そしてこれこそが子供たちを祝福し、救ってくれるものなのです。

親が我が子に遺すことのできる**最大・最良の遺産**——それは**信仰の生涯**なのです。

「なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです」（フィリピ3:13~14） 完